

Support for **Woman** Doctors ～私からあなたへ～

清水 真実 先生【石川県 28期】

お子さん:11歳男、7歳女

(名前に愛と媛が入っており、二人合わせて愛媛)



私は、卒後2年目に愛媛の同級生と結婚。義務内はお互いの県を行き来し現在は石川にて2世帯住宅で暮らしています。義務が明けてから在宅医療を始め、今年度より旦那と共に在宅専門「かがやきクリニック」を開業しました。医師3人体制なので、私達が遠出した時も急な往診などに対応することができます。よく「家でも職場でも旦那と一緒にどうなの？」と聞かれますが、日中訪問診療で離れていますし、困ったことを相談したり、診療もお互いカバーすることができるので色々と便利です。私は認定医や専門医を持っていません。在宅医療は様々な知識や技術を求められるため、その都度勉強しています。CVポート挿入や顎・肩関節脱臼整復などの技術は義務年限内に従事した救急科で得たものです。在宅医療では実に様々な患者さんがおられます。受けている医療処置も様々で、酸素や尿バルンはもちろん人工呼吸器・麻薬のシリンジポンプや腎臓の方もおられます。どんな病気であっても、どんな医療処置を受けられていても、本人や家族が「帰りたい」と願った時、それを全力で支えることが私達の仕事です。また、私達は、本人とご家族、関わったスタッフと積極的に写真を撮るようにしています。笑顔の写真は、その先を生きていくご家族の力となり、関わったスタッフのグリーフケアにもなります。昨年、祖父を自宅で看取ることになりました。98歳まで認知症がありながら自宅で生活できていたのですが、インフルエンザを契機に昼夜逆転となり施設に入所。そこから私が主治医となり訪問診療を行っていました。なんとか昼夜逆転を治そうと薬剤調整をしましたが効果なく「今日も寝ませんでした」と言われると「だから施設に入ってもらったんだよ」と思いながら「すみません」と謝ってしまう家族の気持ちがよくわかり、普段の自分の言い

方を振り返るきっかけとなりました。このまま穏やかに天寿を全うすると思っていたのですが、年末から時々熱を出すようになり、首の腫瘤に気が付きました。どんどんそれは大きくなり、CTで咽頭癌が見つかりました。気管も咽頭も偏位しており、そのまま食べたら窒息の危険がありました。年齢や全身状態からいつ見つかってても何もできませんでしたが、医者として気づかなかった自分を責め、食べるのが大好きな祖父に食べることを禁止しなければいけないのか、悩みました。そんな時、STさんから教えてもらった完全右側臥位での摂取。より安全に食べさせることができると喜びましたが、いざ自分でやってみると難しい！すぐ体勢はくずれ、できるだけたくさん食べさせたい気持ちと自分の食べさせたもので窒息や誤嚥させたらという葛藤を常に抱えながらの介護でした。けれど、幸せそうにプリンを食べのを見て頑張ろうと思いました。そして自宅に帰った翌日、祖父は旅立ちました。前日横で寝ていたのですが、死期性喘鳴だと分かっているのに吸痰してしまう、医療者と家族の両方の気持ちが入り混じっていました。亡くなる数日前までエアロバイクを10分も漕いでいた祖父。元教師だった祖父は、最期までたくさんのことを家族に教えてくれました。私には在宅医として、家族として「看取る」葛藤と覚悟を。ひ孫たちには、認知症や病気になっても、その人の人生全てが不幸せになるのではないということ、命は当たり前前に続くものではないことを教えてもらいました。この命の授業は他では受けることはできません。この経験を活かし、これからも「生きるを支える」在宅医として患者さんに寄り添えたらと思っています。

後輩医師・学生へ一言メッセージ
『置かれた場所でベストを尽くせば、
いつか必ず花が咲く』

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。
連絡先:自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係
E-mail : chisui@jichi.ac.jp